

●特集／新カリキュラム一般教養の展望

新カリキュラムに
おける一般教養

藤 枝 斌

(聖路加看護大学)

はじめに

ここに与えられたテーマは、「新カリキュラムにおける一般教育」ということであるが、わたくしは、ここで新しい看護教育カリキュラムの一般教育の内容がどんなものであるかについて云々することは他の機会にゆずることとして、ここでは一般教育の問題を、高等教育との関連において考えてみることにしたいと思う。

周知のように、大学（短大も含めて）では一般教育課程を専門教育課程とともに必須課程として課することが規定されている。このような規定は、第二次大戦後の教育改革によって採り入れられたもので、このことはわが国の高等教育の歴史の上に重要な意味をもっている。しかしこの一般教育課程は、その教育的意義が十分に認識されないまま導入された感があったため、大学教育において、一般教育課程をどのように位置づけるかという点において、一種の混乱を生じさせることになった。とくに、大学がその本来の教育的任務とするところの専門教育と、どのように関係づけるかという点において、若干の認識の違いが見受けられるのである。

いま看護教育の新カリキュラムをみるとき、果して以上の問題がどのように考えられているだろうか。

このような考えからわたくしは、ここで一般教育がなぜ高等教育において重視されるようになったかを中心にして述べてみたいと思う。これによって新カリキュラムにおける一般教育のための教

育計画を正しく把握することができるだろうし、またそこから、将来の看護教育における一般教育の見通しも自ずから出てくるものと考ええる。

1. アメリカの大学における一般教育の成立

一般教育 (General Education の訳語) の考え方は、1930 年代にアメリカで生まれたものである。それは、その当時でアメリカの高等教育を支配していた伝統的な自由教育 (Liberal Education) を、時代の要請にこたえて改善しようという努力の中から生まれてきたのである。

この自由教育は、ギリシャのアリストテレスによって考えられたもので、それは、直接に生活とか生産のための教育ではなく、生産や労働とは関係のない自由人が、そのもてる閑暇を学問的な研究に費して、知識それ自体を追求することによって人間としての教養を保ようという教育であった。したがってこの自由教育の本質は、ある特殊の狭い知識よりも広く一般的な知識を強調するとともに、それが高度の理性的な知識であることで貴族主義的性格のものであった。このように自由教育は、それ自体貴族主義的なものであったから、当然支配階級、特権階級教育理想となり、自由教育はそれ以後のヨーロッパ世界の高等教育の内容として伝統的なものとなった。アメリカの大学は南北戦争当時 (1861~1865) までは概してこのような伝統的な教育理想が支配的であり、また大学も発達していなかった。しかし南北戦争後、1860 年代になってドイツの大学教育の影響をうけることとなった。ドイツは近代における後進国として、

イギリス、フランスの先進国に追いつくべく科学教育政策に力を入れていたが、それは大学を科学の専門教育機関として整備することによって推進していった。ドイツの主な都市につくられた工業大学 (Technische Hochschule) がそれであるが、これが南北戦争当時のアメリカの工業化に大きな影響を与え、アメリカに多くのいわゆる州立大学がつくられた。これらの州立大学は、農学と工学に関する専門学科を教授することを目的とする大学であった。さらにドイツの大学院を創設させるようになり、大学院はもっぱら専門の学術研究の場所となり、大学もこの影響をうけて次第に自由教育のほかに専門的、職業的教育を行なうようになっていった。このことは、大学が次第に科学の専門化に応じてそのカリキュラムを細分化していくことを意味しており、その反面、大学は専門的な学術の中心になりつつあったことを意味していた。

こうしてアメリカの大学は 19 世紀の後半、州立大学が数多くつくられ、高等教育は発達したが、そこで与えられる教育カリキュラムは専門化し、細分化されたものであった。これは自由教育といっても、もはや自由人を育成する教育ではなかったといわねばならない。そしてこの時期に、大学のカリキュラムは選択制を取り入れ、個々の学生の要求、能力、関心に応じて高等教育を個人化しようという方向を示していた。

高度に専門化していく科学、それに対応して益々細分化される教育カリキュラム、しかもそれが選択制によって履修されるということから生ずる教育のアンバランス、したがってまた教授や学生相互の孤立化、学部、学科間の無連絡など、こうした問題がアメリカの大学の一般的傾向となった。こういった雰囲気の中で、「教育の目的は人間をつくることである」という素朴な発問が提出されるようになったのである。

第一次世界大戦はアメリカの大学を一層発達させる結果となった。大学生の増加である。

大学生の増加はそれ自体、さまざまな教育要求が高等教育にもち込まれることを意味している。すべての学生が学者になるために、学問をするために大学へくるのではなくなった。これに反して

大学の学部、学科は専門化しており、また教授は科学の専門家であって、自己の領域には精通しているが、学生の教育指導に対しては余り関心がない。こうした状態の中から、やがて、専門教育をうけるためのいわば導入コースとして、一般コース (General Course) とか概観コース (Orerview Course) が設けられ、狭い、断片的な専門的知識よりも、広く包括的な全体的見通し、概観を与えるための課程が考えられるようになった。これは、現在の一般教育課程の前身である。

このような大学の動きに対して、非常に大きな影響を与えたのは、1929 年にはじまる経済上の大恐慌と、これにつづくルーズヴェルト大統領のニュー・デール政策であった。1929 年の大恐慌は事実上、19 世紀以来のアメリカ社会の発展を一頓挫させた。それはアメリカの社会に内包されている欠陥の結果であると考えられた。欠陥は是正ねばならないし、それは一人ひとりのアメリカ人の教育によってのみ行ないうるものである。新しい社会をつくるためにはどのような人間をつくらねばならないか。またその人間をつくるためにはどのような教育が考えられねばならないか。これらの問題が、当時のアメリカの教育界の緊急な問題であったのである。

1935 年、アメリカの教育政策委員会は、この問題に対処する来るべき教育のあり方として、大学教育における一般教育の強調と、初等中等教育に社会科を中心とするコア¹⁾(中核)・カリキュラムを導入することを提唱した。この社会科を中心とするコア・カリキュラムは、戦後のわが国の新教育に大きな影響を与えたもので、これは学校の教育活動の三分の二以上を社会科を中心に展開し、児童、生徒は学校での生活を地域社会での生活と直結することによって、そこからさまざまな生活上の問題を自からとり上げ、それを自からの力で解決していく過程を通していろいろと思考し、活動する。こうして児童、生徒はその問題(課題)を解決することを通して、いろいろと学習し、経験を積むわけであるが、ここで児童、生徒に期待されていることは、児童、生徒が、自分の住んでいる社会の生活を改善向上させていけるような社会的な態度や能力を身につけるということであっ

た。このような教育活動はすべて集団活動として進められたが、他人との協力によって、自己の住む社会をよりよい社会に改善、向上させているような人間がそこでは期待されており、またこのような資質と能力をもたせる教育が小学校、中学校の共通の教育であった。

大学における一般教育の強調も、これと同じ主旨のものと考えることができるであろう。個々の専門領域に細分化された大学の専門教育によって、このようなよりよき社会を建設しよう人間は育成されない。19 世紀以来の大学の教育カリキュラムの専門化は、近代科学、技術の発達と軌を一にして進んだものであるから、それ自体当然の成行きであり、科学、技術の発達とともにますます細分化されなければならない。大学が学術研究の中心である限り、その教育カリキュラムがそれとともに分化することはむしろ当然のことである。しかし反面、大学は次の世代の指導の人間をも育成する場所である。もし、伝統的な科学の専門教育によってそれが不可能となれば、大学は別個の教育課程を用意しなければならないであろう。よりよき社会を実現させるために、当面するさまざまな問題を総合的に判断し、理性的にそれを処理していく、責任のある人間——いわゆるよき市民を育成するための教育課程、これがおよそアメリカの大学での一般教育課程の本質的性格であり、成立の要因である。

一般教育課程の教育的任務を一応このように考えるならば、この種の教育は、高等教育に限らず、一個の人間が社会的生活を通して成長、発達する全過程にわたって行なわれなければならない教育である。このことは、実際に学校教育では、初等教育段階、中等教育段階、高等教育段階に分けて考えられており、初等教育段階（小学校での教育）と中等教育段階（中学校、高等学校での教育）では普通教育（これはすべてのものに共通に与えられる教育という意味をも兼ねて用いられる）の問題として論じられている。高等教育段階（大学、短大での教育）では、その教育上の主要な任務が専門教育を行なうということから、職業教育、専門教育と対比する概念としての「一般」教育、あるいは「一般」教養の問題として論じられている。

さて一般教育課程は以上のような成立事情をもっているが、このことからわかるように、一般教育課程は専門教育課程とは別個の独自の教育的任務をもっているといえるであろう。一般教育課程はその教育目的からいって、多方面の内容をもち、しかもそれらがよく調和しているか、あるいは総合的な構造をもっている。そしてこのような調和、あるいは総合のための中心、乃至は焦点に位するのが、すなわち人間なのである。一般教育の目的が人間の教育にあるとよくいわれるが、それはこのことを指しているのである。

わが国の大学の一般教育課程は、人文科学系、社会科学系、自然科学系の三系列に分かれているが、これはあくまでも科学の分類体系を便宜上、借用しているまでのことであって、それぞれの科学の体系の知識を、専門教育における知識と同じような仕方でも学習すべきものとして並べられているのではない。この点こそ、まさに一般教育課程が専門教育課程と本質的に異っているのである。一般教育課程で期待されていることは、単に知識を学習するだけでなく、それを通して学生が自から主体的に、真の知識を獲得していく方法を身につけていくことであり、ものの見方を深化させ、あるいは拡大させていくことなのである。このことが結果として、専門教育が必然的に伴う視野の狭さ、部分性、一面性を補足する上に有効だと考えられるのである。同じ教科目でも一般教育課程の中で考えるのと、専門教育科目の一つとして考えるのでは、その教育方法が全く異っている、いや異っていなければならないことは以上のことから明らかであろう。

■新しい看護倫理の確立をめざして■

看護の思想

青 木 茂

東京女子大学助教授

A 5 527 頁 ￥ 800

東京 医学書院 大阪

振替 東京 9 6 6 9 3

看護の行為にふくまれる思想的問題を歴史的、論理的に、その展開のあとをたどり、新しい看護倫理の確立をめざしたのが本書である。

2. わが国における一般教育課程の成立

以上に、アメリカで一般教育課程が成立した事情を概観し、それに関連して、一般教育課程と専門教育課程との本質的な相異を述べた。次にわが国における一般教育課程の成立について簡単に述べてみよう。

すでに触れたように、わが国の一般教育課程は、戦後の教育改革の一環としてとり入れられた。それはアメリカの大学教育の影響をうけたものであるが、この間の事情は戦後アメリカから派遣された対日教育使節団の報告書によって窺われる。その勧告には次のように述べられている。「日本の高等教育機関のカリキュラムにおいては、一般教育を与える機会があまりにも少く、専門化があまりにも早く、その上あまりにも狭すぎる、そして職業的、専門的な強調があまりにも大きすぎるように思う。自由な思考に対するもっと幅広い背景と職業的訓練の基盤となるよりよい基礎を与えるために、より広い人文的な態度を養わねばならない。このことは、学生の将来の生活を豊かにするとともに、彼が自分の職業上の働きがいかに関人社会の全体図の中に適合するかを知らしめるであろう」と。

戦前のわが国の高等教育は、要約すれば大きく、「大学(旧)高等学校」と「専門学校」という二つの学校群に分けられていた。同じ高等教育でありながら、専門学校では専門の学術技芸を授ける学校として教育を行ない、高等学校は男子の高等普通教育(一種の自由教育)を完成することを目的として教育が行なわれ、ここでは職業的教育は大学(旧制)において与えられた。数の上では専門学校が圧倒的に多く、高等学校はごく一部の選ばれたものだけの教育機関であった。したがってわが国の職業社会の中堅的な指導的地位にある多くの人びとは、高等教育段階で、巾の広い一般教育的な教育を受ける機会に恵まれなかったのである。専門学校出身者は、仕事はできるが、視野が狭いとか、人間ができていないなどとよくいわれたものである。しかしかつてはそれでよかったのである。それは高等教育は即専門教育と考えられ、その任務は、海外、とくに欧米先進諸国の知識、技

術を手取り早く消化できる専門家を育成することにあつたからである。

戦後、この状態は一変した。すべての高等教育の学校は(新制)大学に統合され、そしてすべてのものが初等、中等、高等と累進的に昇っていく学校体系の項点に位置づけられた。ここで重要なことは、すべての専門教育が大学で行なわれるようになったこと、したがってすべての専門教育は一般教育と併置して行なわれるということである。

高等教育をうけるものが、すべて一般教育をうけられるようになったということは、最初にも述



看護

「先生をしておいでなんですってね、どこの学校ですか。」「看護学校の、つまり看護婦の学校です。」「へえ、看護婦の学校ってあるんですか、それで何を教えてらっしゃる。」「かゝる健全なる常識の持主に、「カンゴゲンリ」とは看護の原理であり、押しも押されぬ専門教科の一分野であることを説く前に、私はもちろん心理的に疲労困憊してしまうのである。何故なら、その無邪気な問の背影にある「看護婦とは医者が必要から生じた自然発生の存在である」といった、彼等のゆるぎない信念の普遍性をみとめざるを得ないからであり、このことは日頃の、「教育の理念」だとか「理想的職業教育」とかいう表現につながる洋々たる夢をも、にわかにその生彩を失わせてしまうに充分なのである。私はその都度、あの特殊部落の片隅で我も人も同じ傷をもつが故にその痛みを分かち合う部落民の哀しい姿を何とはなしに思い浮べてみたりする。勿論こういった表現は、これまで輝ける誇りに生き甲斐をたくしてこられた方々にとって一種刺戟的響きをもつものであるかも知れぬが、だが私は何も故なき僻みのあれこれを、綿々と並べたてつつもりでいるわけではない。

法治国家にあつては、国民は須くその生活を法により保護さるべきで、といえは聞えはよいが、裏返せば法的規制によるメカニズムの中に、がんじがらめに

べたように、わが国の高等教育の歴史の上に重要な意味をもっているのである。すべての指導的な職業人が、広い視野の上に立って、責任ある市民として、社会的に活動するということは、社会の進歩にとって非常に大きな力となるであろう。

大学が高度の専門教育を行なう教育機関であることは改めて云うまでもない。しかし、さきにも触れたように、戦後、一般教育課程の教育的意義が十分に理解されないまま導入されたことから、この一般教育についての正しい認識が足りず、現在においても、専門教育と一般教育とのバランス

のとり方において混乱がみられ、一般教育が大学の教育計画の中でその本来の意義から遠い、不当な取扱われ方をしているのを時として見受けるが、われわれはもう一度、戦後、わが国の大学に一般教育課程が設けられたということの意義を十分に理解し、これを教育全体の中に正しく位置づけて、その上で、それをさらに発揚させるような仕方の専門教育とのバランスを考えてみるべきではないだろうか。

教員の資格とは？

中西 睦子

〔東邦大学医学部付属高等看護学校〕

縛られて手も足も出ない状態というのがあり得る。それ故看護教育を正規の教育に、という悲願は切なるものがあり、昭和 28 年 12 月 28 日に設置された神奈川県立の看護高校の出現は、憂慮さるべき点とはとも角として、これまで美容師やアソメさんと同等に足踏みをしていた看護教育の一部がまづは輝かしいバラ色の路線にのせられたという点では、祝福すべきであったに違いない。さてその後 41 年 4 月 1 日現在で、衛生看護科を有する高校は全国で 52 校を数え、さながら雨後の筍の観を呈している。

ここで、ふと教師は一体どういうことになっているのか、といった疑問がわく。いうまでもなく、三年間の専門教育も、その上にのりいかなるコースも、履歴書の行を埋めるには役立つが世に認められる資格とは一切無関係である。

一方、高校教員の資格は 4 年制大学で教職課程を修めて始めて二級が与えられるのであるから、現在高校にすんなり受け入れられる看護教員の数は数えるに足りぬではないか。すなわち、昭和 27 年に高知女子大に、28 年に東大に衛生看護科が設置され、その後 39 年に聖路加看護大学が誕生したが、東大では昭和 41 年 4 月以降実質的意味が失われている。(資料は昭和 41 年 4 月 1 日現在)そこで、上記大学において教職

課程の単位取得が可能であることを前提としても、卒業生全員が吸収される可能性は実際には極めて少ないのではなからうか、という予測をしてみる。それでは、現在何らかの方法で資格取得が可能であろうかといえ、ないとはいえないがなきに等しいことだけは確かである。

そのうちの一例に、東京栄養大学の第二部保健衛生学科あり、いま一つは日本女子大学通信教育ありで、ことここに至っては、もはや私の頭はいたづらに混乱するばかりである。資格とは一体何であろうか。

とにかく、学校はできて生徒もいる、そして先生は？ どうやら学校設立に直接参与した進歩的頭脳も、重大な本末転倒をやったのけたようである。それとも、本来の高校教育は別の陣容にまかせてあるから、あとは特殊技術屋が、必要に応じて技術の切り売りをすればことが足りるということなのか。さても納得のいかなることではある。たゞ一つ確かなことは、看護教育が常識的な人びとの意識の中に、抵抗なく入りこむにはかなりの時を要することであり、看護婦としての職業的プライドは、当分の間きわめて裏付けの薄い、純粹に精神的なるものとしてとどまるが故に、教師を苦しめるであろう。